

浄土往生ということ

元中央仏教学院講師 石田 慶 和



現在、浄土真宗の布教をなさる方々が、一番困っていらっしゃるのには、「浄土往生」ということを、人々にどう伝えるかということではないでしょうか。言い換えれば、地獄・極楽ということ、みんなに納得させるように、お話しするにはどうすればよいか、ということです。

この5～60年程の間に、人の心はすっかり変わってしまいました。いまどき、天動説（地球が中心で天の星が動いているという考え方）を信じている人はいないと言ってよいのではないのでしょうか。太陽のまわりを地球がまわっていると、誰もが考えています。小学生でも、中学生でも、高校生でも、学校で習う天体の運行は、すべて地動説（太陽が中心でそのまわりを地球や火星・木星などの惑星が動いているという考え方）です。源信僧都の『往生要集』に書かれているように、この地球の下には等活地獄や黒縄地獄があると信じている人は、ほとんどないでしょう。まして、阿弥陀経に説かれているように、「これより西方に、十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽といふ」（『註釈版聖典』121頁）なんて、およそ荒唐無稽のお伽話としか思わないのではないのでしょうか。

80年程前に、龍谷大学教授の野々村直太郎という人が、『浄土教批判』という本を書きました。それをめぐって大論争がおきました。世に「野々村事件」としてよく知られた事件です。大谷派でも、その後、金子大栄先生や曾我量深先生が追放された事件がありました。それも、極楽の存在の問題に関係しています。その頃と現在とでは、すっかり様子が変わっています。宗教的表現は、象徴的表現です。「浄土」と言っても、現実人間の見え経験できる清浄の土があるというのではないとされます。「高次の実在」と言えばいいのでしょうか。

近頃は、誰も見た者はありませんが、およそ150億年前に、宇宙は大爆発をおこして現在も膨張中だとするガモフという科学者の説が、正しいと思われるされています。それは、科学者の説は実験と観察に基づいているからです。

ハッブル宇宙望遠鏡や、ウィルソン山の望遠鏡などの観察で、遠いところにある銀河がどんどん遠ざかっているという事実が確かめられ、それに基づいて、宇宙は膨張していると説明されるのです。その説明の方が正しいというわけです。

そこから、みんな死んだら天国に生まれると、漠然と考えています。小さい子が事故などで死んだりすると、学校の先生たちは、あの子はきっと天国で私たちを見守っている、と言います。そして、あの子の分も元気で生きましよう、と残った子供たちに話します。もしそうなら、どうして死んだ子のことを悲しむのでしょうか。

そうです。これだけ文明がすすんでも、死後のことは誰にもわからないのです。身体はたしかにゴミのように捨てられるでしょう。しかし、私はどうなるのでしょうか。私は身体だけではありません。手や足をきりはなくても、それが自分だとは、誰も思いません。そうすると自分は、やはり五蘊仮和合です。色（物質・肉体）・受（感受作用）・想（表象作用）・行（意志や記憶等）・識（認識作用）という五つの要素が仮にあつまっているもの（五蘊仮和合）にすぎません。それが、死とともにどこかへ行ってしまうのでしょうか。行くとすれば、迷って、生きている間に為した行為によって、その結果を得るとしか考えようがないではありませんか。それが「自業自得」ということです。仏教はそう教えます。生死流転というのは、そういうことです。

仏教では、一切の有情は、迷いの境涯にあると教えます。このままでは、迷いを繰り返して行かねばならないのです。浄土の教えでも、私たちは「罪惡の凡夫」で、「曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなし」（同218頁）と教えます。それがいつわりない私たちのすがたです。そういう迷いから出ようとなさったのが、お釈迦さまであり、親鸞聖人です。「生死出づべき道」（同811頁）というのは、そういう意味です。

NHKのテレビ番組をみていましたら、「プラネット・アース」という番組がありました。その3回目です。そこには地下の洞窟が写されていました。カメラマンが苦勞をして、暗黒の洞窟を写しているのです。無数の蝙蝠が飛び交い、目のない動物がいる不気味な暗闇の世界を写し出しているその様子は、ほんとうに息をのむような景色でした。私は、それを見ながら、底知れぬ虚無感に襲われました。この地下のありさまは、このとお

だろう、さらに深くは行ってゆくと、灼熱のマグマの融けている地帯があるのだろう、しかし、それを知ったところで、何になるのだろう、私の命の終わりと結びつかないではないか、私の命と何の関わりもないではないか、そんなことをいくら知っても何にもならないではないか、それよりも昔の人は、六道輪廻ということで、何を考えていたのか、それは、この命の流転ということではなかったのか、そのことこそが、大切なのではないだろうか、とっていました。

二

私たちが死後、六道を輪廻するというのは、そういうことです。迷いの境涯ということは、そういうことなのです。この地下を掘って行くと、現実、等活地獄や黒縄地獄がそこにあるというわけではありません。アメリカ大陸や、メキシコの大地を掘ってゆくと、テレビが写したように、大きな洞窟にぶつかるでしょう。それが現在の知識です。昔の人は、それと同じように、地獄がどこかにあるように教えました。それは、そのように教えて、初めて私たちが自分の罪深さに気付くからです。

『往生要集』に、よく知られたこういうことが記されています。

かの樹の頭を見るに、好き端正にして嚴飾の婦女あり。かくのごとく見をはりて、すなはちかの樹に上れば、樹の葉は刀のごとくして、その身肉を割く。次にはその筋を割く。かくのごとく一切の処を劈き割りはりて、樹に上ることを得をはりて、かの婦女を見れば、また地にあり。欲の媚たる眼をもつて、上に罪人を看て、かくのごとき言をなさく、「なんぢを念ふ因縁をもつて、われこの処に到れり。なんぢ、いまなんがゆゑぞ、来たりてわれに近づかざる。なんぞわれを抱かざる」と。罪人見をはりて、欲心熾盛にして、次第にまた下れば、刀葉、上に向ひて、利きこと剃刀のごとくして、前のごとくあまねく一切の身分を割く。すでに地に到りをはりぬれば、しかもかの婦女はまた樹の頭にあり。罪人見をはりて、また樹に上る。かくのごとく無量百千億歳、自心に誑かされて、かの地獄のなかに、かくのごとく転行し、かくのごとく焼かること、邪欲を因となす。乃至、広く説く。獄卒、罪人を呵責して、偈を説きていはく、「異人、悪をなして、異人、苦の報を受くるにあらず。みづからの業をもつてみづから果を得、衆生みなかくのごとし」と。 (『註釈版聖典七租篇』803頁)

「自業自得」ということがどういうことか、よく理解できるのではないでしょう。自分の起こす煩惱によって、私たちは、六道を輪廻するのです。それを破ってくださるはたらきとして、親鸞聖人は仏さまの本願のはたらきを、法然上人のお言葉のなかに見出されたのです。

自分の為した行為の結果を、自分が受けるなら、どこへも文句のもっていきようがありません。来世でよい結果を得ようとするなら、この世では、善いことをするしかありません。その道が聖道門です。捨家・棄欲(家を捨て欲望を棄てること)をして、ひたすら善根功德をつむならば、限りない努力のはてに、やっと解脱への道が開けるでしょう。しかし、そのためには、厳しい努力と精神集中がもとめられるでしょう。親鸞聖人が比叡山で20年の修行をなさったのは、自分の力で生死を解脱しようとなさったのです。その結果は「いづれの行もおよびがたき身」(『註釈版聖典』833頁)という聖人のお言葉にあらわれているのではないのでしょうか。

そこで出会われたのが、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまらすべし」(同832頁)という法然上人のお言葉でした。法然上人でさえも、念仏の力によって、救われる道を歩まれたという事実、それが親鸞聖人の心を打ったのでしょう。この「いづれの行もおよびがたき身」によびかけてくださるのは、他力、すなわち仏さまの本願力しかないということに気付かれた親鸞聖人は、ひたすらその力に帰依されました。私たちに教えられたのも、そのことです。

その上、親鸞聖人は、こちらから救ってくださいとお願いするのではない、「先手の勅命」といって、仏さまから呼んでおられるのだということに気付かれました。それが「本願招喚の勅命」(同170頁)ということです。なぜでしょうか。それは、私たちの罪業が深いからです。親鸞聖人は、「さるべき業縁のもよばさば、いかなるふるまひもすべし」(同844頁)とおっしゃいました。それが、私たちの偽りのないすがたです。何でも、思い通りにできると思っている人は、自分が悪人だとは気付かない人です。そういう思いのなかには、傲慢きわまりない自信があります。それが人間の力を、かぎりのないものと錯覚させるのです。

そうした思い上がりにいるかぎり、人間は救われようがありません。互いに人を傷つけたり、殺したり、まるで地獄のような営みをしてゆかなければなりません。自分の内に恐ろしい心があることに気付いて初めて私た

ちは、仏さまに帰依する気持ちが生まれるのです。

三

その仏さまが迷いのない世界へ導こうとされるのです。それが「浄土」です。親鸞聖人は「念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもつて存知せざるなり」(同832頁)とおっしゃいました。どうしてそんなことをおっしゃったのでしょうか。この後には、「たとひ法然聖人にすかされまらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ」(同頁)とおっしゃって、その理由として「自余の行をはげみて仏に成るべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」(同頁)とおっしゃっています。このお言葉は『恵信尼消息』の「上人のわたらせたまはんところには、人はいかにも申せ、たとひ悪道にわたらせたまふべしと申すとも、世々生々にも迷ひければこそありけめ、とまで思ひまらする身なればと、やうやうに人の申し候ひしときも仰せ候ひしなり」(同811頁)という聖人のお言葉とも符合して、親鸞聖人のお気持ちをよくあらわしていると思われまします。

親鸞聖人にとっては、極楽というのは、決して安楽の世界ではなかったのです。まさに迷いを超える世界だったと思われまします。そして、そこに生まれるということは、有情の求めてやまない流転輪廻から脱することだったのです。

昔は、極楽で栄耀栄華の生活をするように思っていたのでしょうか。そんなことはありません。『教行信証』には2箇所、曇鸞大師の「かの安楽浄土に生ぜん願ずるものは、かならず無上菩提心を発するなり。もし人無上菩提心を発せずして、ただかの国土の受楽間なきを聞き、楽のためのゆゑに生ぜん願ぜん、またまさに往生を得ざるべきなり」(同247頁、326頁)というお言葉が引いてあります。親鸞聖人はどういうつもりでこの言葉を引かれたのでしょうか。私は聖人のお心には、かの阿闍世王が「無根の信」を得て喜んだとき、「もし、われあきらかによく衆生のもろもろの悪心を破壊せば、われつねに阿鼻地獄にありて、無量劫のうちにもろもろの衆生のために苦悩を受けしむとも、もつて苦とせず」(同287頁)と言っ

たことと深く応じていると思います。

浄土は安楽を楽しむところではないのです。そこから一切の有情を救うはたらきが発動するところです。どうして親鸞聖人だけが「還相」ということを強調なさったのでしょうか。勿論、私たちにはそんな殊勝な気持ちはありませんが、「還来穢国」というのは、この穢れの多い現世へ還るということです。『歎異抄』にも、「おもふがごとく衆生を利益する」(同834頁)と記されていますし、また「まづ有縁を度すべきなり」(同835頁)とも記されています。

親鸞聖人は本当に、仏さまの力によってこの世へ帰ってきて、迷っている衆生を救うはたらきをするのだと考えていらっしやったのです。そのはたらきをなさっているのが、法然上人だったのです。親鸞聖人が法然上人を尊敬してやまらなかったのは、そう思っていたらっしやったからです。親鸞聖人にとっては、「往相」「還相」ということも、現実に法然上人のお姿を通して実現されていたことだったのです。

「浄土往生」ということも、親鸞聖人にとっては、決して夢・幻のことではなかったのです。この生死の世界、この迷いの世界を出た境涯として、私たちの最後の依り処となる場所だったのです。そこから、この世が照らし出される光明の満ちた世界が、聖人にとっての「浄土」ではなかったのでしょうか。「真仏土巻」に記されている浄土の表現は光明ばかりです。

京都女子学園を、甲斐虎山先生とともに創設された甲斐和里子先生に、「みほとけをよぶわが声はみほとけのわれをよびますみ声なりけり」というお歌があります。「南無阿弥陀仏」という名号は、決して私が「おたすけください」とお願いする言葉ではありません。仏さまの方から、「どうぞ、おいでなさい」と呼んでいらっしやるのです。その「呼び声」が、お念仏にほかなりません。甲斐和里子先生のお歌は、それをうたっていたらっしやるのです。「浄土」というのも、その呼び声が生まれてくる清らかな世界です。そういう世界を、自分のほんとうの心の依り処としてもつことが、念仏者でなければなりません。そういう世界は、科学がどんなに進歩しても、それによってなくなるものではありません。甲斐和里子先生のお父さんの足利義山先生も、「はかりなきいのちのほとけましましてわれをたのめとよびたまふなり」とうたっていたらっしやいます。これが「往生浄土」ということです。

(龍谷大学名誉教授：宗教学)